

人麻呂歌集略体歌と額田王歌原形の助辞表記

——確定条件の接続助詞「ば」の文字化と読添え——

渡 瀬 昌 忠

平成元年十一月十一日、早稲田大学小野講堂で行なわれ

たシンポジウムでの稲岡耕二氏の提言は、初期万葉の額田王の歌は朗々と歌われたものであつて書かれたものではなく、上代における和歌の文字化は天武朝の人麻呂歌集古体歌（略体歌）から始まったものと見るべきだ、との趣旨であつた。司会の立場にあつた私は、稲岡氏の「明日香浄御原朝における和文表記の展開」（『明日香村史中巻』昭和49年3月）に、額田王の「思_レ近江天皇_レ作歌_レ」の筆録原形が人麻呂歌集の略体表記に等しいものであつたと述べられていたのを思い出しながら、それについての言及を促したところ、稲岡氏は「現在は反省している」と言われ、他の講師からも会場からも、氏の提言に対する反論らしい発言はついに出不ずじまいであつた。しかし私は、むしろ右の稲岡論文に示された見解の方が妥当だと考えるので、そのこと

を書いておくことにする。

人麻呂歌集略体歌における順接の接続助詞「ば」の表記は、「者」によつて文字化したり読添えとしたりされるが、全用例58例のうち、「者」の文字化14例に対して「ば」の読添え44例、読添率は76%で、かなり高率である。そのうち仮定条件を示すものは、文字化9例に対して読添え25例（読添率74%）であるが、確定条件を示すものは、文字化5例に対して読添え19例、読添率79%を数える。

右のうち、仮定条件の「ば」の文字化と読添えについては、別稿「人麻呂歌集略体歌における接続助詞の表記をめぐつて」（『万葉集研究第十八集』）に考察したので、本稿は、確定条件の接続助詞「ば」の表記について考察し、額田王歌原形のそれに及ぶ。

一、確定条件「バ」の読添え

人麻呂歌集略体歌における確定条件の接続助詞「ば」の表記のうち、八割に近い「バ」の読添え例から見ていくことにする。Aは、恒常(時)的または偶発(然)的な原因結果の関係を示す客観的な確定条件「バ」であり、Bは、特に打消の「不」を文字化し「ねバ」の形をとって原因の強調されるものであり、Cは、前件に「恋ふ」またはそれに準ずる「思ふ」の語を有する「バ」である。

(1)確定条件「バ」の読添え 19例

A 1 春去、先三枝、さるへり幸命在、あらば後、ニモ相莫恋、ソ吾妹(10・一八九)

五)

2 春去、さるへり為垂柳、ノ十緒、ニモ妹、ハ心、ニ乘在鴨(10・一八九六)

3 夕去、さるへり床、ノ重不、レ去、ニモ黄楊枕、ハ何然、ガ汝、ニ主待、ニ固(11・二二五)

〇三)

4 夕去、さるへり野辺、ノ秋、ニモ芽子、ハ末若、ニ露、ニ枯、ニ待、ニ難(10・二〇九)

五)

5 見度、みわた近、ニモ渡、ハ廻、ニ今、ニ哉、ニ来、ニ座、ニ恋、ニ居(11・二二七九)

6 月見、みづみ国、ハ同、ニモ山、ハ隔、ニ愛、ニ妹、ハ隔、ニ有、ニ鴨、ニ居(11・二四二〇)

7 鳥玉、とりたま間、ニモ開、ニ乍、ニ貫、ニ緒、ニ縛、ニ依、ニ後、ニ相、ニ物(11・二四四八)

8 玉梓、たますゐ路、ニモ往、ニ占、ニ相、ニ妹、ハ逢、ニ我、ニ謂(11・二五〇七)

B 9 潜、ひそ為、ニ海、ニ子、ハ雖、レ告、ニ海、ニ神、ハ心、ニ不、レ得、ニ所、ニ見、ニ不、レ云(7・一三〇三)

(7・一三〇三)

10 立、た座、ニ態、ニ不、レ知、ニ雖、レ念、ニ妹、ニ不、レ告、ニ間、ニ使、ニ不、レ来(11・二三八八)

(11・二三八八)

11 路、ち後、ニ深、ニ津、ニ嶋、ハ山、ハ麿、ニ君、ハ目、ニ不、レ見、ニ苦、ニ有、ニ有(11・二四二二)

三)

12 遠、とほ山、ハ霞、ニ被、ニ益、ニ還、ニ妹、ハ目、ニ不、レ見、ニ吾、ニ恋、ニ居(11・二四二二)

六)

13 人、ひと祖、ハ未、レ通、ニ女、ハ兒、ハ居、ニ守、ニ山、ハ辺、ハ柄、ニ朝、ニ通、ニ公、ハ不、レ来、ニ哀、ニ後、ニ旋、ニ頭、ニ歌(11・二三六〇)

14 麿、ま不、レ見、ニ恋、ニ吾、ニ妹、ハ日、ニ来、ニ事、ニ繁、ニ居(11・二三九九)

七)

C 15 是、こゝ耳、ハ恋、ニ度、ハ玉、ハ切、ニ不、レ知、ニ命、ハ歳、ニ経、ニ管、ニ居(11・二三四)

七四)

16 健、けん男、ハ現、ニ心、ハ吾、ハ無、ニ夜、ハ昼、ハ不、レ云、ニ恋、ニ度、ハ居(11・二三七六)

17 我、われ妹、ハ恋、ニ度、ハ劍、ニ刀、ハ名、ハ惜、ニ念、ニ不、レ得、ニ居(11・二四九九)

18 君、きみ恋、ニ浦、ハ経、ニ居、ハ我、ハ裏、ニ紐、ハ結、ニ手、ハ徒、ニ居(11・二四〇九)

19 思、おも依、ニ見、ニ依、ニ物、ハ一、ニ日、ハ間、ニ忘、ニ念、ニ居(11・二四〇四)

四)

Aは、すべて「動詞(已然形)+バ」の形で確定の条件句となる。しかも1〜6の六例は、それがすべて初句にあつ

て、B・Cには条件句の初句に出る例がないのと対照的である。1〜6の確定条件における前件と後件との内容を見ると、1〜4は、「春されば」、きまつて「三枝」が「先づ咲き」(1)、「しだり柳」が「垂る」(2)のであり、「夕されば」、「黄楊枕」は、「床の辺去らぬ」(3)のものであり、初秋には「野辺の秋芽子」の「末」が「露にぞ枯るる」(4)。そして1〜3は、その前件と後件とが序詞を生み出し、4は季節の感懐となる。また5・6は、「見渡せば」、明らかに「近き渡り」と見え(5)、「月見れば」、「国は同じ」と見える(6)、それなのにと、そのあとに逆接的な「を」を文字化したり(5) 読添えとしたり(6) して、逢えないう恋人への思いに転じる。この場合、「を」を文字化するか読添えとするかは、一首の文脈を明らかにする上での、その必要の有無による。5は下句に係結びを二度も用いる複雑な構成なので、「乎」を文字化する必要があったのだろうし、6は結句「隔^{へり}有^{ある}鴨^{かも}」の詠嘆の「鴨」の文字化によって「月見^げ国^{くに}同^{おな}」の逆接的な「ヲ」の読添えを可能にした(拙稿「人麻呂歌集略体歌の助辞表記へ続」萬葉一三五号、二四頁)のである。1〜6の初句の確定条件の「バ」は、それぞれの歌の内容、文脈によって、最初の五音節句としてごく自然に読添えられたものであった。

7・8は、「縛依^{くくりよすれば}」(7)「占相^{うらなへば}」(8)の条件句が第三・四句にあつて、その句を中心として一首が構成されており、7は、「間開けつつ貫ける」^{あはたま}「烏玉」(黒玉)の「緒」も、「括り寄すれば」必ず寄り合うものなのに(どうして二人は逢えないのか)、と余情をこめ、8は、「路行き占」で「占へば」、「妹は(我に)逢はむ」とのお告げが確かに得られたのであつたよという。7・8は、誤字説を採らない限り、今日では、そのように訓むのが最も適当であろう。8の結句を「我^ニ謂^ウ」と連体形で止めて訓むことも行なわれているが(大系・注釈など)、人麻呂歌集略体歌では、完了の「つ」を連体形で用いる場合は、「妹^ニ相^ム受^ム日鶴鴨^{ヒツツルカモ}」(11・二四三三)、「端^は々^々妹^み見^み鶴^{つる}」(11・二四六一)と文字化するか、「秋^{あき}夜^よ霧^{きり}発^は渡^{わた}凡^{たゞ}々^々夢^{ゆめ}見^み妹^{いもうめ}形^{かたち}矣^{なり}」(11・二四二一)と歌末の「矣」を文字化することによって結句が第四句へ戻る形(すなわち第四句切れ)であることを明らかにし、係結びの七音節句として「夢^{ゆめ}見^み」と読添えさせるか、いづれかに限られている。しかも、略体歌では「モ」は必ず読添えられその例もきわめて多く、「名^な惜^{おし}念^{ねん}不得^{えら}」(11・二四九九)と「ツモ」を読添える例があり、それはC17として挙げたように、確定条件「バ」の読添えを受ける歌末の結びである点も共通している。8の訓みは、

上句と下句とを「…占相…我謂」と呼応させて訓むべきものと決定してよいであろう。A1～8の前件と後件とは、すべて客観的な因果関係であり、したがって文脈が読み取りやすく、「バ」の読添えが容易であったと言つてよい。

B9～14の六首は、すべて「不」動詞^{ハバ}動詞十打消助動詞(已然形)十「バ」の形をもつ確定条件である。9・10の「海神」心不得^{ハバ}「9」と「妹」不告^{ハバ}「10」との打消「不」は、それぞれの前の「雖」告^{ハバ}「9」と「雖」念^{ハバ}「10」との逆接を受けて、「ども…ず」の類型表現をなし(前掲拙稿「人麻呂歌集略体歌における接続助詞の表記をめぐつて」)、さらに「不得…不」云^{ハバ}「9」「不」告^{ハバ}…「不」来^{ハバ}「10」と打消で呼応して、二重に否定表現の類型を重ねている。9も10も、最初の接続助詞である逆接の「雖」を文字化した後は、打消の助動詞「不」を二度にわたつて文字化して、二度目の接続助詞としての順接確定の「バ」は已然形「不」に読添えさせているのである。「ども…不…不」の類型反復によつて、「バ」の読添えは確実となるのであつた。そして、最後の打消「不」に最も強い詠嘆がこめられる。11～14の四例は、前件が「不見」三例(11・12・14)、「不」来^{ハバ}二例(13)、後件は「苦しくありけり」(11)

「恋ひにけり」(12)「哀しも」(13)「恋しき」(14)と主情的な詠嘆で結んでいる。なお、11の結句は「苦有^{ハバ}」(桜楓社版)とも訓まれているが、「しましくも別ると言へば悲しくもあるか」(19・四二七九、船王、宴歌)のような類型の諸例には、「ふる雪の光を見れば貴くもあるか」(17・三九二三、紀清人)のような例ばかりで、「ねば」の形が一例もないし、「しましくも」とあつても「か」で結ばない14の例もあるので、12と同じくケリを読添えて「苦有^{ハバ}」と訓む。

Bは、六例のうち四例(9～12)までが前件の「不」を短歌の第四句に置き、後件を結句に据えているし、一例(13)は旋頭歌後半の結句の中に「不」来^{ハバ}「哀」と前件・後件を有している。もう一例(14)のみは、短歌の第二句に「不見^{ハバ}」とあるが、それは第一句の「暫^{ハバ}」を受けて第三句の「吾妹^{ハバ}」へかかる連体修飾句をなし、しかも上句全体を「吾妹^{ハバ}」と逆接的に詠嘆して中止する。「不」の前件に続く後件が一首中の詠嘆部分に位置していることに変りはないのである。確定条件Bの、打消の「不」に「バ」を読添える「ねば」の形は、打消「不」の文字化によつて前件を強め、後件をより詠嘆的にするもので、定型和歌の詠嘆部分にとつて、重要な一類型表現となっている。Bの場合、「バ」の読添えは「不」の文字化によつて確実となるので

ある。

C 15の「是耳恋度」の二句は、旧訓「カクシノミ コヒヤワタラム」を契沖の代匠記（精撰本）が「如是耳志恋思度者」（9・一七六九）とあるのをあげて「カクノミシ コヒヤワタラム」と改訓したのが、一般に行なわれている。

「如是耳恋哉将」（4・六九三、大伴千室）、「如是耳恋也度」（11・二五九六）の例があるからだが、また「奥津浪敷而耳八方恋度余牟」（11・二五九六「或本歌」）、「常如此耳也恋度味試」（7・一三二三）などの例もあるので、「カクノミヤ コヒワタリナム」（大成本文・古典全書・古典大系）とも訓まれている。

C 15を「是耳恋度」（通説）と訓むにしても「是耳恋度」（大成・全書・大系）と訓むにしても、疑問の助詞「ヤ」を説添えることになる。しかし、反語の「ヤ」（11・二四〇四、12・二八五六）「ヤモ」（11・二四六七）は文脈上説添えが可能だが、疑問・質問の「ヤ」を文字化なしに説添えることは困難であり、その例は人麻呂歌集略体歌にも万葉集にも他に一例もないから、C 15は古義の「カクノミシ コヒワタレバ」の訓みを採るべきものであること、私の学習院大学大学院での昭和六十三年度・平成元年度の国文学演習に参加した大木信幸氏の修士論文（平成元年度末）「上代助詞の研究——人麻呂歌集略体歌の係助詞の読み

添え表記——」に説かれている。

代匠記にも古義にも挙げられた次の一首は、実はC 15に
とつてきわめて重要な類歌である。

如是耳志恋思度者たまきはる命も吾は惜しけくもなし
（9・一七六九、抜気大首）

第一・二句「かくのみし恋ひしわたれば」の前件が一致するのみならず、枕詞「たまきはる」で始まる後件にも深い
共通性があるからである。C 15の第四句「不知命」は珍しい表記である。というのは、人麻呂歌集略体歌の表記法は、基本的には和歌の語序に従って訓読漢字を配列するものだから、「不」「雖」「將」など漢文訓読から得た助辞の訓読漢字は反転表記しても、実字（自立語）の場合に漢文式に反転表記して倒読させることは、これ以外に例がないからである。「不知命」と書かれていれば「不知命」などと訓むのが普通なのであり、現に「不知有命」（11・二四〇六）の例がある。しかるに、C 15では「不知命」と訓める。それはなぜかといえ、第三句の枕詞「玉切」を文字化して「命」にかかると示す（この点に関しては稲岡耕二「人麻呂歌集の訓みの基底」）万葉集研究第十五集一三三頁に言及がある）とともに、結句を「歳経管」と末尾の助詞「つつ」まで文字化して、それが第四句へ戻る表現であり、第四句切れの歌であることをも示している

からである。このように明示された文脈の中では、前件「かくのみし恋ひしわたれば」に対する後件としては、「たまきはる命も知らず(自分ノ生死ヲ考エルユトリモナイ)」と言いつて、倒置的に「歳は経につつ」と連用修飾の結句を添えるのが最も自然である。「玉切」の枕詞に続けて第四句を「不知命」と珍しく漢文式に反転表記したのは、この一句を「一まとまりの完結体」とし、ここで句切れとなることを示そうとしたからではなかったか。そうした表記・表現者の意図が、この例外的漢文式表記を生んだものと考えられる。

かくのみし恋ひしわたればたまきはる命も吾れは惜し
けくもなし(巻九類歌)

かくのみし恋ひしわたればたまきはる命も知らず歳は
経につつ(C15)

巻九の類歌の「命も吾れは惜しけくもなし」に相当するのがC15の「命も知らず」であつて、いずれも恋の自失状態を述べるのであるが、その後件を共通して「なし」「ず」の否定語で終止している。そして、それはC15のみならず16・17の二首についても言えることなのである。

C15・16・17の三首は、いずれも前件に「恋度」の句を有する点で共通する。そして、後件には、15は「玉切不

知命いのちをしらず、16は倒置された「健男ますらをうつし 現心モト 吾無ハなし」、17は「劔刀名やぶらぎ 惜を 念不得かねず」とあり、いずれも否定表現を末尾にもち、「自分の命や名を惜しいと思うような正気もなくなった」というほどの思いを述べる。三首の表現内容は、全く共通しているのである。

C18は、前件に「君に恋ひうらぶれ居れば」と「恋ふ」の語を有し恋の継続状態をいう点で、15・17の三首に通じ、後件に打消の語はないが、「悔しくも我が下紐の結ふ手いたづらに(結ブ手ガムダニナルバカリデ)」(君ハ来ナイ)と、否定の気持がこめられていることは、言うまでもない。

C19の前件の「思ひ寄り見ては寄りにしものにあれば」は、注釈の口訳を借りれば「あなたを思つて心が寄り、あなたに逢つて一層寄つた事であるから」の意。人麻呂歌集略体歌には「心ハ妹ニ依テ鴨カモ」(10・二二四二)や「心ハ依テ恋ハ比ヒ日ヒ」(11・二四八二)のような表現もあるから、「思ひ依見おもひよみ 依よ」の「依」も「心が寄る」の意であろう。「思ひ」始めて以来、心が寄つて深い恋となつてしまった現在までの経過を理由として、「一日の間も忘れて念へや」の後件は、たとい「一日の間」でも思い忘れることはない、反語で否定するのである。

なお、人麻呂歌集略体歌に次の一首があり、

我心等望使念 新夜、一夜不落夢、見与(12・二八)

第二句は「等望使念」とも訓まれている。そう訓めばC20として挙げるべきものとなるので、一言しなればならない。早く略解に「或人云」として「トモシミモヘバ」の訓みが見られていたが、これは本居宣長の書入本万葉集によると田中道麿の説で(朝日古典全書新訂版頭注)、古典大系・桜楓社版・全書新訂版の訓みはこれに準じている。「等望使」の訓は、これに従うべきものである。「等望使」を「等望」の意の音仮名表記とすることが疑われているが、「等」は「ト乙類」の音仮名で問題はなく、「望」も日本書紀・肥前風土記に用例がある。「使」は音仮名としての用例がないが、使用不可能というわけではあるまい。「乏し」の語は、「少い」「羨しい」などの意にも用いられるが、ここでは「逢うことが少ないので心が惹かれ、逢いたいと求める」気持ちを表わすので、それは「使を待ち望む」状態でもある。その気持を「等望使」にこめた一種戯れの音仮名表記だったのではなからうか。人麻呂歌集略体歌に相手からの使を待つ恋歌の発想が顕著に認められることは、拙稿「人麻呂歌集略体歌の七夕歌」(松田好夫先生追悼論文集『万葉学論攷』平成2年4月)に述べた。「乏」の字がトモシともスペナシ

とも和訓されるので、スペナシは後に見るように「無乏」と書き、トモシは「等望使」と書いたのが、人麻呂歌集略体歌表記者の工夫でもあり戯れでもあったのだと思う。そして、その一字一音表記の語に「等望使念」と「ミ」を添えることも、人麻呂歌集略体歌には「丹穂哉」(7・一二九七)のような読添え表記もあるから、さほど不自然ではない。ただし、「等望使念」と訓むと確定条件の「バ」の読添えの例となるが、後件を希求の「与」で結んだ例がない。それに対して、歌末を「与」で結ぶ略体歌は、

吾妹子見 偲 奥藻 花開在 我告与(7・一二四八)

里遠 眷浦経 真鏡床 重不 去夢 所見与(11・二五〇一)

二首とも第二句切れとなっているので、この歌も、我心等望使念、新夜、一夜不落夢、見与と、第二句で切れるものとする方がよからうと思われる。特に二五〇一番歌とこの歌との構成の類似は、こう並べて見ると歴然としている。この歌を「バ」の読添え例としないう方がよいと思うゆえんである。なお、「トモシミオモフ」は、埴書房版・古典文学全集の訓で、桜井旺文社文庫・古典集成・伊藤角川文庫などが従った。

さて、(1)ABCの「バ」の読添えについて見てきたとこ

ろをまとめておこう。Aは、単純で客観的な原因結果の關係を示す確定条件で、前件が第一句にある六例（1〜6）はもとより、第三・四句にある二例（7・8）においても、その因果關係は内容上きわめて明らかであり、「バ」の読添えは容易であった。Bは、六例（9〜14）とも、前件において「ね」の打消で原因を強調することによって、後件を主情的詠嘆的にする類型表現をなし、その場合には一層「バ」の読添えは自然となった。そしてCは、「恋度」三例（15〜17）と、それに類する二例（18・19）との、いずれも抒情主体の「恋」の継続を理由とする前件に対して、後件は否定的表現で受けて詠嘆する。そうした表現の類型によって「バ」の読添えが可能であった。ABCともに、(1)は、一首の定型和歌（短歌・旋頭歌）としての音数律と文脈によって、確定条件の「バ」の読添えが可能となる例のみなのである。

人麻呂歌集略体歌以外の万葉集における確定条件「バ」の読添えは、人麻呂歌集非略体歌の一例を含む次の五例のみである。

① 天漢霧立度牽牛之の楫、音所（きこめ）聞夜（ふけゆけ）深往（ふかむか）（10・二〇四四、七夕）

② 古家丹妹等吾（いにしへに）見（み）黒玉（くろたま）之久漏牛方（ひろうま）乎見（み）佐府下（さふりか）（9・一七九八、人麻呂歌集非略体歌）

③ 秋芽子（あきつゆこ）之散去見（みれ）鬱（おぼほ）三妻（よめ）恋為良思（ら）棹（し）鹿鳴母（も）（10・二一五〇）

④ 往（み）而見（み）而來（こ）恋敷朝香方山越（こほしき）置（て）代宿不勝鴨（二）（11・二六九八）

⑤ 玉梓（たま）能（の）妹者珠（は）毘（か）足氷木乃清山辺（あ）時散染（ま）（7・一四一五）

①の「夜の深け往けバ」の「バ」の読添えは、A4の「夕去れバ」のそれと同様であり、A4では初句に、①では倒置された結句に、と位置を異にするのみである。②の非略体歌の「見れバさぶしも」、③の「見れバおほほしみ」、④の「見て来れバ恋しき」は、A5「見度せバ近き」A6「月見れバ国は同じヲ」に通じるところもあり、B13「来ねバ哀しも」B11「見ねバ苦しくありけり」B14「見ねバ恋しき」などから打消の「ね」を除いたような、ごく自然な形の読添えである。⑤の「時けバ散りぬる」も、A8「占相（うらな）へバ：我れに謂りつも」に似て、単純な因果關係で、しかも七音節の結句であるから、容易に「バ」が読添えられる。五例とも、だいたい人麻呂歌集略体歌のAに準ずるものとしてよいであろう。略体歌よりも他の助辞の文字化が多くなっているだけに、「バ」の読添えは一層容易であることは言うまでもない。しかし、両者に共通する普遍性のあるこ

とも見落してはならない。そして、人麻呂歌集非略体歌を含むこれらの確定条件「バ」の読添えは、人麻呂歌集略体歌における読添え表記法の、ごく部分的な残存形態だと言つてもよいだろう。

二、確定条件「者」の文字化

では、人麻呂歌集略体歌において、確定条件の「者」を文字化しているのは、どのような場合であろうか。

(2) 確定条件「者」の文字化 5例

1 雲隠小嶋、神之恐者目、心問哉(7・一三一〇)

2 妹当遠、見者恠吾、恋相依無(11・二四〇二)

3 恋事意追不得、出行者山川、不知来(11・二四一四)

一四)

4 隠沼、從、裏恋者無、乏妹名告、忌物矣(11・二四四一)

一)

5 念、余、者丹穂鳥、足沽来、人見、鴨(11・二四九二)

二)

1は、第二句末の「之」と第三句の「者」とを文字化している。もしこれらが文字化されず「小嶋神恐」となっていたら、幾通りかの訓みが可能となろう。(1)に見たような類型表現によつていないし、(2)の1の表記・表現には特異な点がある。「恐」を形容詞(かしこし)に訓ませてバを読

添えさせることは(1)の諸例には見られないところだし、「目問心問」という表記・表現は、「問」を原本系玉篇へ一切経音義(二二)、大方広仏華嚴経音義(二)に見える佚文および万象名義(三三)に「隔也」とするのによつていふこともあつて、読みにくさがいちじるしい。そこで「恐」の前後に「之」と「者」とを文字化し、歌末に「哉」を文字化して結句の「心問哉」を反語に読ませ、それらによつて、はじめて文脈が明らかになり、「小嶋、神之恐者目、問」という確定条件の前提と後件との訓みが定まるのである。なお、この「問」の「レ」の読添えについては、『萬葉』一三六号(平成2年7月)拙論(五三頁)に述べた。

2の「妹当遠、見者」は、(1)A6の「月見」が客観的に「国同」に見えるという結果を導くのととは反対に、理解したい結果を生む。恋する者が「妹が当り見む」(1・八三、古歌、2・一三七、人麻呂石見相聞歌など)とするのは、恋心を癒すためであり、人麻呂歌集非略体歌でも「遠くとも夜さらず見む妹当者」(10・二〇二六、七夕)とも「我が恋ふる妹当、しぐれ降れ見む」(10・二二三四、詠雨)とも歌われるのであるが、それに反して、(2)2では、「妹が当り遠くも見れば」、その結果は、「吾」が「恋」は消えるどころか、逆につり、「恠しくも吾れは恋ふるか」と嘆かなければならない。もちろん、それは(1)B12の「妹

が目見ねば吾れ恋ひにけり」の前件「見ねば」とも正反対である。そのような(2)の歌の表現の特異性のゆえに、「バ」の自然な読添えは期待しにくく、その「者」の文字化がどうしても必要であった。「者」の文字化は、そのように表現の個性化とも結びついていたのである。

3の前件には、(1)Cのような「恋」の語もあり、(1)Bのような「不得」という打消の「不」の字もある。しかも、それらの間には「意追」という和風義訓熟字もあって訓みにくい。もし第三句の「者」の文字化がなかったら、第一・二句のあたりで「バ」の読添えのなされる恐れがあるろう。そうした誤読を避けるために、第三句「出行者」の「者」の文字化が必要なのであった。

(2)123の三例は、それらの第二・三句の「者」の文字化によって、「目こそ隔てれ心隔てや」(1)という対照形式の反語、「あやしくも吾れは恋ふるか」(2)という驚きと詠嘆、「山を川をも知らず来にけり」(3)という気づきの詠嘆を導き、いずれも個性的で斬新な表現内容が得られたのである。

4の第二句が「従」「者」二つの助詞を文字化して「裏ゆ恋ふれば」と訓むことを明確にしたのは、次の句の「無乏」の訓みを定着させる必要があったからであろう。「無乏」

は、単独ではスベナシの和語表記である。人麻呂歌集略体歌の

何時^{ハシモ}不^{トハ}恋時^{トハ}雖^レ不^レ有^{アハ}夕方任^テ恋^ハ無乏^ハ(11・二
三七三)

この短歌の結句は、「恋無乏」と訓まれる。その「すべなし」はドウシヨウモナイの意の語(形容詞)であるが、これを「無乏」と表記したのは、なぜであったか。

「乏」は漢語で、文選李注の用語で言えば「匱乏之乏」(巻三21ウ注)であり、和訓すれば「ともし」とも「すべなし」とも訓める。楊子幼「報孫会宗書」に「明明求財利常恐困乏者、庶人之事也」とあり、李善は「漢書董仲舒对策曰、夫皇皇求財利常恐匱乏者、庶人之意也」と注する(巻四十一21オ)が、この「乏」は「窮」に通じる。楊子雲「長楊賦」には「振人之所乏」とあり、李善が「振、救也」と注するのは、「救人之所窮」というに等しい(巻九4オ)。日本書紀に「窮乏」「貧乏」「困乏」とあり、万葉集に「窮」を「すべなし」(13・三二五七)と訓むように、「なすすべもない」状態の意で「乏」と訓読する漢語なのである。

もちろん「匱乏之乏」は、「とぼしい、少ない」の意だから、上代語の「ともし」にもあたる。人麻呂歌集非略体歌に「乏」(9・一七〇二、10・一九九七、二〇〇二、二〇〇

四)「乏^{とほ}しむ」(10・二〇一七)と訓んでいるのは、その和訓による。非略体歌では「すべなし」は「無^な為^{すべ}便^{べん}」(11・二二六八)と書いているが、本来は「乏」に「ともし」「すべなし」の両訓があつたのであろう。人麻呂歌集略体歌の表記者は、「乏」字による誤読を恐れて、トモシにはすでに見た「等望使」(12・二八四二)を、スベナシには「無^な乏^{とほ}」を用いたのであろう。

非略体歌の「無^な為^{すべ}便^{べん}事者」(11・二二六八)の「無」は「為^{すべ}便^{べん}」が「無い」の意であるが、略体歌の「無^な乏^{とほ}」の「無」は、沢瀉久孝『万葉歌人の誕生』(一九八頁)に言うように、「乏」を打消す意味ではなく、「スベナシと訓む為のナシの訓を示さむとして親切に添へたものに過ぎない」。なぜなら、人麻呂歌集略体歌では、「有^あ無^な」の「無^なし」(形容詞)は十例(7・二二七五旋、一二八五旋、10・二二三三三、11・二二七六、二二八五、二四〇二、二四一三、二四二二、二五〇二、12・二八四九)を数えるが、すべて和語・和歌のシタックス語序に従つて、「相^あ依^よ無^な」(10・二二三三三、11・二四〇二)「故^ゆ無^な」(11・二四一三)「飽^あ事^{こと}無^な」(11・二五〇二)のように表記され、決して反転表記することはない。「乏」の意を否定する「無」ならば、反転表記はしないはずなのである。この「無乏」の「無」は、実字(形容詞)としての「無^な」ではなく、ナシの訓(発音)を示すための虚字であり、書

き添えであつた。そういう例はあるのか。類例はある。孝徳紀大化元年九月戊辰条の訓注に「垂^{した}、此云^{したる}之^の娜^な屢^る」とあり、万葉にも「垂^{した}柳^{りゅう}」(10・一八五二)と書かれた例があるのに、人麻呂歌集略体歌の表記者は「為^{した}垂^{した}柳^{りゅう}」(10・一八九六)と書く。この「為」はシダリのシの訓(発音)を示すための訓読漢字による書き添えであらう。人麻呂作歌が「便^{すべ}」(2・一九六、二二三)を「為^{すべ}便^{べん}」(2・二〇七、二二〇)と書いたのもそれに近いであらう。人麻呂歌集略体歌の表記者が、形容詞「乏^{とほ}」の「なし」を訓読漢字「無」によつて書き添えようとする場合、「乏^{とほ}無^な」と書いては、その「無」が形容詞と解される恐れは多分にある。そこで形容詞「なし」の表記には決して用いない反転表記で「無乏」の形に書き添えたものであろう。ここに、いかにも漢語的な顔をした和語「無乏^{とほなし}」の表記が生まれたのである。

実は、右に述べたことの要点は、すでに沢瀉前掲書に説かれているのであるが、最近の柳沢朗「無乏と乏——人麻呂歌集五首の訓の根拠とその表記の性質——」(稲岡耕二先生還暦記念『日本上代文学論集』平成2年4月)の沢瀉説批判を考慮して、若干の修正を加えつつ、私なりに説き直してみたのである。柳沢論文は、「無乏」の「無」を否定の意味をもつものとし、「無乏」の「意味」を「なくなる」ことがない・つきることがない」として、右の歌では、「夕方に

なつて我が胸の内からつきることなく湧き上がってくる恋の奔流をおさえかねていること」を「無乏」と表記したのだという。仮りに、そうだと見よう。なるほど、右の短歌の結句「恋、無乏」の形ならば、「恋の思ひはつきるところがない」の意だと言ふこともできようが（ただし、その場合にはスベナシと訓むことは適当でない）、しかし、次の歌の場合、

我妹^ニ恋^テ無乏^{スベナシ}夢^ニ見^{ムト}吾^ハ雖^ハ念^不所^レ寢^{イハ} いほえなきクニ（11・2）
四二二

柳沢論文は、「あとからあとから尽きることなく内から衝きあがってくる恋をおさえるすべもないから、眠れないでいるのであろう」（九二頁）と言ふが、「我妹子に恋ひて」に直結する心の状態が「無乏」なのであつて、「恋、無乏」と訓んで「寝ねらえなくに」へ続く文脈ではない。金井清一「すべなし」と歌うことは、——主として人麻呂の場合——（『論集上代文学第二冊』昭和46年11月、『万葉詩史の論』所収）の説くように、「恋して自らの気持をどうしようもなくて」の意で「夢に見むと」に続く文脈であり、「恋のすべなきにせめて夢に慰さめられんとして更に深くすべなき淵に落ち込んだ自己を歌」うのである。

4の歌も「恋者無乏」と訓む文脈ではない。そう訓めるなら、柳沢論文のいうように、「自分の胸の内からとめどな

く衝きあがってくる熱っぽい恋の奔流の手応えを『すべなし』と吐露している」（九三頁）と言えるかもしれないが、そうではない。「隠り沼の下ゆ恋ふれば」を受けるのだから、「逢いたいと思う心をせむすべもなくて」（金井論文）の意の「無乏」にはかならない。「すべなし」の語の意味は「乏」にあるので、漢籍に多い貧窮のスベナサを恋心のスベナサに転用したのであり、「無」の字は「すべなし」のヨミのための書き添えなのである。

柳沢論文はこれらの「無乏」について、その「無」を「乏」を否定する語とした上で、文選の陸士衡「楽府」（日出東南隅行）の「沈姿無乏源」（巻二十八13ウ）の「無乏」（なくなることがない・つきることがない）の語を人麻呂が利用したものとし、

渡瀬の論に従えば、「無乏」は「和訓漢語」ということになろうかと思われるが、ここに訓の成立・流通は考えらるるであろうか。

と言ひ、「無乏」に「すべなし」の意味はないから、「すべなし」が漢語「無乏」の訓として成立・定着することはありえない、と述べている。しかし、これは迷惑な批判であつて、私は「無乏」を和訓漢語だとは考えない。だいいち、文選に唯一例の「無乏」で、それも李善がわざわざ「乏、或為定」と注して「無定」となっているテキストもある（五

臣注本はそれにより「向曰」として「其源不_レ定」と注することを言っているような疑わしい語を、李善の注で文選を讀んだはずの人麻呂歌集略体歌の表記者が、和訓漢語として用いたとは考えられない。もし「乏」を否定する意味の漢語を文選から借用するとすれば、数例を数える「不_レ乏」の方を選ぶであろう。「すべなし」と和訓しえないことは「無_レ乏」と同じだが。例えば、陸士衡「豪士賦序」に「大欲不_レ乏_ニ於身」（卷四十六5才）とあるように、恋心の「なくなる_レことがない」ことをいうのには適しているし、人麻呂歌集略体歌には、「不得」を「えず」（7・一三〇三、11・二四四二）、「かぬ」（11・二四一四、二四二五、二四九九）、「かつましじ」（11・二四八一）などと訓ませ、「不_レ顔面」を「しのぶ」（11・二四七八）と訓ませるような表記もあるからである。人麻呂歌集略体歌の表記に「不_レ乏」ではなく「無_レ乏」とのみ書いたのは、やはり「すべなし」と訓ませようとする表記者の意図があつたからであり、「無_レ」は書き添え（虚字）であつたと考えざるをえないのである。もし、表記者に「無_レ乏」の字面によつて恋心の「ともしきことなし」の意を加えようとする意図が幾分かでもあつたととしても、それは「すべなし」と訓ませた上での、二次的な歌意の拡充にすぎず、柳沢論文が「この『無_レ乏』には、自分の恋の生命力を体感したところが語られている。それは悲恋

の苦しみを先取りしたような『すべなし』とは全く無縁である。（九三頁）と述べるようなものではないであろう。ただし、柳沢論文が人麻呂歌集非略体歌の「乏」についてトモシの訓に復すべきことを主張している点は肯える。

さて、そのような「すべなし」の語表記としての「無_レ乏」を4の歌の第三句に置いた場合、もし第二句に「從_レ」者」の文字化がなかつたら、果して容易に「すべをなみ」と訓めたであろうか。「乏」を「すべ」と訓ませ漢文式に「無_レ乏」と倒読させるような表記であるならば「無_レ乏」のように訓むことは容易だろうが、「無_レ乏」の二字が「まとまりで」「すべなし」の語表記なのだから、そう訓むことは困難である。これを「すべをなみ」と訓ませるためには、やはり「從_レ裏_{（しよ）}恋者」の助辞の文字化によつて、文脈を明らかにすることが、どうしても必要だったのである。

5の歌の第一・二句に「者」の文字化がなかつたら、最初の二字は「念_{（おもひ）}余」なども訓まれかねない。そして、第一・二句の前件を受ける後件にも「足_{（た）}沾」という和風義訓熟字があるし、続いては「来_{（き）}」と読添えるべき屈折がある。そこで、第二句の「者」を文字化することによつて、かろうじて「念_{（おもひ）}ふニシ余_{（の）}ニシカ_{（は）}ば_{（に）}ほ鳥ノなづさ_{（ひ）}来_{（き）}シヲ人見ケムかも」の文脈を明らかにし、片仮名で示した助辞を読添えることを可能にしたのである。

なお、5の歌と第一・二句を同じくする「念西余西鹿齒すべをなみ吾れは言ひてき忌むべきものを」(12・二九四七)の歌は、第三句以下は4の歌のそれと類句関係にあるが、この二九四七番歌の異伝「一云」に、「無乏出行家当見」とあつて、4の「無乏」と同一の表記をもつた歌が人麻呂歌集略体歌以外にもあつたことが知られる。この異伝歌の第一・二句の原形は、おそらく5の歌と同じく「念余者」であつて、人麻呂歌集略体歌と同じく簡略な表記ながら「者」は文字化されていたらうと思われる。その歌の原形は、

念余者無乏出行家当見

と推定され、人麻呂歌集略体歌の周辺には、同様の略体表記の和歌の記録の存在したことがうかがわれて興味深い。

(2)の1・2・3は、一首が「者」をはさむ前件と後件とで構成されていた。それにくらべても、(2)の4・5は、さらに屈折が多い。4は「したゆ恋ふれば」の前件が「すべをなみ」の後件で受けられて、さらに「妹が名告りつ」の四句切れへと続くし、5は「念ふにし余りにしかば」…「なづさひ来しを」が、さらに「人見けむかも」の結句で受けられる。「者」の文字化がなかったら、そうした文脈の屈折を読み取ることが困難だったらうと思われる。また、(1)Cが「恋ふ」「思ふ」の語を前件に有していたように、(2)4・

5にも「したゆ恋ふれば」「念ふにし余りにしかば」と、それらの語があるけれども、(1)Cの諸例が、その前件と、否定的な表現を有する後件とによって、一首全体を構成していたのに対して、(2)4・5は二例とも右に述べたように屈折の多い表現なのであつた。(2)4・5の「者」の文字化は、(1)Cと比較しても、文脈上その必要性が高かつたと言わなければならぬ。

以上によって、人麻呂歌集略体歌における確定条件の接続助詞「ば」の表記は、類型的な表現の(1)ABC十九例の場合には、定型和歌(短歌・旋頭歌)の文脈と音数律とによって、「バ」を読添えることが容易になされるようになっており、それが基本的な表記法であつたと認められるが、(2)の五例のように類型的でない表現・表記をもち、一首の文脈を明らかにする必要のある場合には、例外的に「者」の文字化がなされたものと言えるのである。

三、額田王歌原形の略体表記

天武朝初期の和歌表記と考えられている人麻呂歌集略体歌よりも前に、こうした和歌表記はありえなかつたであろうか。

近江朝の和歌表記の実例として、われわれがもっている貴重な資料がある。額田王の次の重出歌である(並べられ

ている鏡王女の歌には今は触れない。

額田王思_ニ近江天皇_ノ 作歌一首

君待登_ト吾恋居者_ハ我屋戸_ノ之_ノ簾動_ウ之_ウ秋_ノ 風吹_ク (4・四八八)

額田王思_ニ近江天皇_ノ 作歌一首

君待_ト吾恋居者_ハ我屋戸_ノ乃_ノ簾令_ウ動_{カシ} 秋_ノ之_ノ風吹_ク (8・一六

〇六)

神田秀夫「人麻呂歌集と人麻呂伝」(昭和40年4月、四七頁)は、右の二首の題詞が全く同じであり、本文の用字も共通する部分が多く、訓みくだけせば全く同文だから、「多分、共通の資料から出たものと思はれる」として、その資料は、次のような「略体に近い用字法」で記されていただろうとした。

君待 吾恋居者 我屋戸 簾動 秋風吹

これは、巻四と巻八の表記から、両者間に異なっている文字を巻の撰者によって補われたものとして除き、共通する文字だけを資料の原形として取り出したものである。確かに、巻四と巻八との撰者が、原資料に対して別々に文字を補い現形に整えたとしたら、その補った部分にのみ相違が生じると考えてよいであろう。しかし、両者ともに同じ文字を補うということもありえよう。第二句の「者」がそれである。これは訓読漢字であるが、補われて文字化され

た助辞では、巻四では第三句の「之」、巻八では第四句の「令」、結句の「之」が訓読漢字であるから、両方に訓読漢字「者」の補われた可能性は残るのである。

稲岡論文(本稿最初に掲出)は、「この重載歌の共通字面を抜き出せば、次のようになる。

君待 吾恋居 我屋戸 簾動 秋風吹

これは、そのまま、人麻呂歌集略体歌の記し方に等しいものと言いうるだろう。」と記す。額田王歌の資料の原形が人麻呂歌集略体歌の表記法と等質のものであったとすれば、本稿に考察してきたところによって、「者」を文字化しない原形を示す稲岡論文の方が正しいということになる。人麻呂歌集略体歌では、(1)C15、18の諸例のように、前件に「恋ふ」の語を有し、後件に否定的な表現を置き、一首が前件と後件とで構成される場合には、確定条件の「バ」はすべて読添え表記とされていたからである。特に人麻呂歌集略体歌のC18は、額田王歌の右の原形と似るところがある。

君待_ト吾_ガ恋居_ハ我_ガ屋戸_ノ簾動_シ秋_ノ風吹_ク(額田王歌)

君_ニ恋浦_ヒ経居_ハ悔_モ我_ガ裏紐_ヲ結_テ手徒_ニ(1)C18)

第一・二句は、ともに「君」で始まり「恋」の語をもち「居」で前件をなす。そして、第三句以下の後件では、否定語そのものはないが、ともに「君」は来ず、いたずらに、「我が」屋戸に風だけが吹き、「我が」下紐だけが解けるの

である。単に表記のみならず、歌の内容構成もきわめて深い共通性をもつ。異なるのは、額田王の歌に新文芸用語ともいふべき「簾」「秋風」が詠みこまれており、感覚が新しく見える点であろう。それが何に由来するかは、また別の問題である。

稲岡論文が「人麻呂歌集略体歌の表記が、人麻呂個人の趣向や都合で生み出されたものではなく、より普遍的なものであった形跡を、「万葉集自体の中にも指摘しうる」(七六八頁)とし、

天智朝の歌を、略体で記した資料が存し、それを巻四および巻八の筆録者あるいは編纂者が付属語を補記しつつ万葉集に編入した際の相違が、「両巻に端的に現われ、逆に原形表記をうかがわせるという、希有な例がここにあると言つてよい。(七六九頁)

と述べているのは、稲岡氏のシンポジウムでの自己否定にもかかわらず、考え方の方向を誤っていないと私は思う。

なお、稲岡論文は、「岡本天皇御製」と題する長歌の反歌第一首(4・四八六)の結句「君二四不在者」の原形を略体的に「君不在者」と記してあったかと想像している(七七〇頁)。その原形がもし人麻呂歌集略体歌の表記に準ずるとすれば、確定条件「バ」の読添え(1)Bの諸例のように、

「不」の形は必ず「バ」を読添えとしてゐるから、「君不在」の原形を考へる方がよいであろう。稲岡論文は「キミアラネバ」と訓むが、それだと母音アを句中に含む「不足音句」(木下正俊『万葉集語法の研究』)の結句となつてしまふ。ここにも、定型和歌の略体表記的な文字化と読添えとが想定されるのである。

初期万葉人は確定条件「者」を文字化するすべを知らなかつたわけではない。例えば、推古朝遺文の「薬師仏像造像記」(古京遺文)には、「当時崩賜造不勸者」と「者」を文字化している。しかし、非定型の散文と定型和歌とは、和語表記の事情もおのずから異なつたはずである。

定型短歌の成立とその自覚と創造活動とは、ひとり人麻呂初期にのみとどまるものではなかつたはずであり、近江朝の額田王こそは、漢文学の洗礼を受けた、人麻呂以前の最も大きな和歌創造の活動者なのだから、人麻呂歌集略体歌前史として額田王歌の表記世界を想定することは、決して不当ではないであろう。